

大阪大学未来共生セミナー

2013年5月6日(月) 上映会+講演会

多文化教育の危機

-苦悩するフランス公立学校の現在-



講師 ピエール・テヴァニアン (作家、E.ドラクロワ高校哲学教諭)
指定討論者 池田 賢市 (中央大学文学部教授)
司会 園山 大祐 (大阪大学人間科学研究科准教授)
通訳 菊池 恵介 (同志社大学グローバルスタディーズ研究科准教授)
森 千香子 (一橋大学法学研究科准教授)

日時：2013年5月6日(月) 14時~17時30分

場所：大阪大学(吹田キャンパス)人間科学部(51番教室)

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1番2号 最寄り駅 モノレール「阪大病院前」

(アクセス案内 <http://www.hus.osaka-u.ac.jp/access/access.html>)

主催 大阪大学未来戦略機構第五部門(未来共生イノベーター博士課程プログラム)

共催 日本学術振興会二国間交流事業共同研究<CHORUS>

定員 120名(予定) 参加費無料

お問い合わせ先 大阪大学人間科学研究科教育制度学研究室

E-mail : sonoyama@hus.osaka-u.ac.jp

【プログラム】

14時00分～14時10分 ■開会あいさつ

志水 宏吉(プログラム・コーディネーター)

14時10分～15時30分 ■映画上映「スカーフ論争—隠れたレイシズム」

ジェローム・オスト監督 (フランス/2004年/カラー76分/日本語字幕付)

〈休憩 15分〉

15時45分～16時30分 ■講演 ピエール・テヴァニアン

(作家、E.ドラクロワ高校哲学教諭)

「スカーフ禁止法」の経緯と背景——フランスの教育現場で少数者差別が制度化されたのはなぜか (フランス語、逐次通訳付き)

16時30分～16時50分 ■コメント 池田賢市 (中央大学文学部教授)

16時50分～17時30分 ■全体討論

近年フランス社会を揺るがしている問題のひとつに、いわゆる「イスラム・スカーフ問題」がある。すなわち、政教分離を国是とするフランスの公立学校において、ムスリム女学生のスカーフ着用を認めるべきか否かをめぐる論争である。1989年の最初の論争以来、繰り返し議論がなされてきたが、2004年に制定された「公立学校におけるこれ見よがしな宗教シンボル着用の禁止法」(通称「スカーフ禁止法」)をもって「決着」したかと思われた。だがその後も、イスラム・スカーフをめぐる議論は、ことあるごとに蒸し返され、現在もなお燻り続けている。

「スカーフ問題」とは、いったい何か？また、論争の背景には、いかなる問題が隠れているのか？本企画ではジェローム・オスト監督のドキュメンタリー『スカーフ論争—隠れたレイシズム』を上映したあと、高校の現場でスカーフの女生徒を擁護し、スカーフ論争でも禁止法に反対する立場をとってきた数少ない論客でもある哲学者ピエール・テヴァニアンを講師に招き、なぜ大半の教員たちがスカーフの女生徒を排除する法律に賛成する立場をとったのかを探り、フランスの公教育における現代の課題を考察する。

講師略歴 ピエール・テヴァニアン (Pierre TEVANIAN)

1970年パリ生まれ。エコールノルマル卒業、哲学アグレガシオン取得。現職はドラ
ンシーのユージェヌ・ドラクロワ高校哲学教師。教鞭をとる傍ら、人種主義、植民
地主義をテーマに幅広い執筆活動を展開。主著に *Le voile médiatique. Un faux débat : «
l'affaire du foulard islamique »* (Raison d'agir, 2005), *La République du mépris.*

Métamorphoses du racisme dans la France des années Sarkozy (La Découverte, 2007), *Chronique du racisme républicain*,
(Editions Syllepse, 2013), *La haine de la religion. Le nouvel opium du peuple de gauche?* (La Découverte, 2013)がある。
さらに良質な記事の提供で知られるインターネットメディア «Les mots sont importants» (<http://lmsi.net/>) の主
幹を2000年より続け、その成果は書籍にも収められている (2010年、リベルタリア社より出版)。

